浜港南本牧 頭 、建設 事

若築建設株式会社 常務執行役員 建設事業部門工事担当 丸 Ш

事現場の所長として赴任し、 たことはその後に担当した 括所長になりました。 をまとめる工事作業所の統 テナの増加やコンテナ 『事にも役立ちました』。 年後にはいくつかの工 状態でのスタートでし 事を経験させてもらっ 特にいろいろな港 印象深い工事の一 何も 事 改良工 置工事や埋立区画乗り込み、汚濁防・ 据 工 事、 事業開始と同時に現場に 護岸築造工

たので、

事を担当した。 (付工事など、各種の港湾 正浩 氏(まるやま・まさひろ) 1974(昭和49)年若築建設入社。東京 支店で主に陸上土木工事を担当。1984 (昭和59)年に横浜支店が開設され、管 ケー 内の海上土木工事を主に担当。1996(平 成8)年横浜支店土木部長、同支店次長、 東京支店副支店長、2005(平成17)年羽 ソン製作・ 「この現場 田事業所長、2010(平成22)年執行役員建設事業部門担当を経て、2013(平成 25)年から現職。武蔵工業大学(現東京 都市大学)工学部卒。東京都出身。62歳。

進められている。 は約217ha。工事着手は 大水深・高規格のバースを てが行われ、 のブロックに分けて埋め立 1990(平成2)年で、5つ 整備するもの。 大型化に対応するため 現在も整備が 埋立面 積

|建設事業に携わった。 | 工

1990(平成2)年から

・間、横浜市の南本牧ふ

ことがなかったのですが、 膜設置工事では、 短時間に位置決めが可能に ポンダーはそれまで使った 機)を採用した。「トライス ないため、 ランシットでは誘導ができ なると判 トライスポンダー(電波測位 陸 最初に担当した汚濁防 上から離れ、 断 L 購入しま 従 来の 1 止

の中仕切の上膜の設

事、

地盤

初は する 術が導入された。 などを繰り 機を初採用し、実用化した。 社開発した着座式捨石均し 数年前に開発し、 場に持ち込みました。最 石 . 導入された。同社は自)捨石均し工事にも新技 材の入れ方や量など ソンマウンドを構 返し行った上で、 陸上試験

かった。 と深く、 れました」。 の施工が求めら 新技術が数多く導入さ 規 各工 さらに 大水深・短工期で 事 大 れて 水深 0 3 工期も短 11 がの 11 たたた 40 が

電波で計測する 設置位置

という。 で16人の自社社員が在籍。 全体を見ながら、発注者との 統括所長はそれらの工事の はそれぞれ所長がいますが、 務の一つだった。「各工事に のマネジメントも重要な業 円を超える工事を手掛けた 工事を合わせると年間60 工 事作業所にはピーク時

たという。 し機」の開発にも る「水中バイブロ式捨石均 的な作業ができました」。施 たのですが、2回目は効 で苦労しまし 工データは、 た。この機械で2回施工 工方法を確立していきまし ンを図りながら、 船員とコミュニケーショ 外洋でも使え 活用さ 最適な施 作業 れ 率 L

正

浩氏

かなければなりません。 社員の配置などを考えて 資機材や作業員の手 統括所長は現場社員 各 億



写真:着座式捨石均し機(均地郎) 図:赤色部が南本牧ふ頭

復帰した。「2005(平成羽田事業所長として現場に 走路新設事業に携 17)年から5年間、 ら離れた。それが9年後 ントも勉強になりました」。 はこの工事で生かすこと た。南本牧ふ頭の工事経 、業の担当を外れ、 だけでなく、 1996(平成8)年に マネジメ わりまし 羽 現場 田 D 滑 験

に生かしてほしい」。 事の面白さを感じてもら 現場のコミュニケーション ところがある。若い人たちも を大切にしながら、 海の工事は何かおおらかな 海象や気象などに左右され り返り「海の工事を担当でき 大変なことも多いのです て良かったと思っています。 できました」という。 ろいろな経験を次の現 これまでの工事経験を振 海の工